

春山は明るく、冬枯れの自然が生氣づいてい
る。川面をわたる風も、やわらかさをともなつ
てのどかな風景の中に消えていく。菜の花ばた
けの黄色と麦ばたけのみどりとにあいまつて、
げんげの紅が、見事なんだら模様をつくりだ
している。「春の山うしろから煙が出だした」
と詠んだのは、あの数奇な人生をたどった尾崎
放哉であったが、なるほど、四季の春は、土匂
う土の春そのものである。

四月は、学校生活の出発のときであり、新入
生はそれぞれ希望と期待に胸をふくらませ、そ
れにほんのちよつとの不安をおりませた様子で
道をいそぐ。その中でも、黄色の帽子に大きめ
のカバンを背負った小学一年生の姿が、妙に印
象的だ。

新人生といえば、この四月に本県で小学校に
入学したピカピカの一年生は、三一、七六一名、
中学校では三〇、五八三名であった。いずれも
公立関係の数であるが、このうち西会津町立黒
沢小学校ほか十四分校で入学児童が一名、中學
校でもいわき市立貞治中学校は一名の新入生を
迎えて、昭和五十八年度の教育活動が始まった。
大規模校には、大規模校の特色があるようによ
り、小規模校には、小規模校の特色がある。それは

都市部あれ山村地域あれ同じことである。
教育の一面が、こことこころの結びつきであ
るとすれば、たつた一人の新入生よ、その清純
な心を失わずに、雄々しくはばたいていつて欲
しい。

ところで、もう一つの新入生——小学校三九
五、中学校一七九。高校と養護学校等を含める
と六六三名の春秋に富んだ優秀な人材が、今年
本県ではじめて教壇に立つた。彼らに託された
使命は大きい。二十一世紀の担い手が、すぐ目
の前にいる。未来をひらく心豊かなたくましい
人間の育成のため、児童生徒の一人一人を大切
に、全力投球で接して欲しいと思う。

歩きつつ風を生みけり新教師 山下妙子

ふたたびところで。お届けする「教育福島」

誌にほんのすこし変化をつけた。表紙絵は米倉
兌先生に連続十回の長丁場で「おくのほそみち」
を。表紙絵に寄せて作者の語る「ちよつとひ
とこと」とあわせ鑑賞していただくと、墨彩に
秘められた先生の魂がわかるはず。提言も、「は
るなつあきふゆ」の四季の移り変わりの中でそ
れぞれの立場から、なるほどうなずけるもの
をお願いした次第。日本学士院会員・文化功労
者の高橋信次博士、永世クリーンの堀沢久美子

さん、東京芸大在学中に安宅賞受賞の日本画家
今井珠泉氏、手織座主宰宝生あや子さんなど文
字どおり各界で活躍の多才者々。表紙絵、ゲ
ラビア、巻頭言、提言と心なごんだところで特
集記事に目をとおしていただければと思う。

春一番が去つて、桜前線が通り過ぎていった。
春の愁いがさわやかな活動にとつてかわる季節
が、足音をしのばせてひそやかに、もう、すぐ
そこにはいる。

(ひ)

